ウラジオストク滞在に関する報告について（６月分）

１. ロシア語学校について

ロシア語の授業は５月と同様で「文法」「会話」「聞き取り」「読解」の４科目で構成されています。

６月に入り、「聞き取り」の授業では、先生が変更になったため、それまで使用していた教科書ではなく、ロシアの短いドラマを見て、台詞や内容を確認するという授業に変わりました。

６月末時点で、私の在籍するクラスは計６人となりました。特に中国からの留学生が留学期間を終えて母国に帰国したようです。また、９月以降は極東連邦大学の学部へ編入することが決まっている学生もおり、一時的に母国に帰り、編入の準備をしている場合もあるようです。

２. ウラジオストク市内の状況について

・治安状況　当地で日本人が犯罪に巻き込まれたという情報はありません。ただ、韓国人が強盗被害に遭ったという情報があり、外見が似ているアジア系外国人が犯罪対象になったということには、注意が必要だと思われます。

・気 候　６月のウラジオストク市では朝から午前中にかけて霧が発生し、昼以降は晴れるという天気が多く見られました。また、一日中、小雨や霧雨が降る日もあり、少々雨が多い印象がありました。しかし、日本のように豪雨となることはなく、傘が必要というよりはフードや帽子をかぶるだけで十分に雨を避けることができます。

晴れた日は気温も高くなり、海岸沿いのビーチなどには海水浴を楽しむ人々も見られました。水がまだ冷たいことや、ロシア人は肌を焼くことが好きということもあり、海水浴客も海に入るというよりは、浜辺で横になっている人が多いようです。

そして、５月下旬から寮のお湯がとまっていたのですが、６月上旬にはお湯が出るようになり、温かいシャワーを浴びることができるようになりました。ただ、ロシア人によると「夏にはまたお湯が出なくなる」とのことです。いつお湯が出なくなるのか、不安に思いながら蛇口を捻る日々が続きます。

（写真１：海岸通りの浜辺）

３．会話クラブについて

私が通っている極東連邦大学のロシア語学校にはさまざまな国から学生が来ています。また、極東連邦大学の本科においてもロシア人の学生がさまざまな言語を学んでいます。そういった背景から、いくつかの言語の「会話クラブ」があり、ロシア人と外国人達との交流の場となっています。現在、私は日本語と英語の会話クラブに通っており、それぞれ週一度ずつ開かれています。ロシア人だけでなく様々な国籍の人たちと触れ合える場となっています。

各会話クラブでやり方が異なり、国の特色が少し出ているように思います。日本語会話クラブは教室や図書室を借りて行い、毎週テーマが一つ決められ日本語とロシア語で話します。それに対して、英語の会話クラブはカフェの一室を借り、ゲーム感覚で進めながら、ホットトピックスの発表や主催者が用意したテーマについてパートナーと話します。

それぞれが自分にとっても貴重な体験となっており、こういった時間も大切にしながらロシア生活を送っていきたいと考えています。また、中国語や韓国語の会話クラブもあると聞いているので、機会があれば参加してみたいと思います。

（写真２：英語会話クラブ）

（写真３：日本語会話クラブ）

４．ウラジオストク市の日本の面影を紹介

ウラジオストク市はロシア極東に位置し、日本と距離が近いこともあり、古くから深い関係にありました。かつては規模の大きな日本人街があり、1876 年には政府公館が置かれ、1922 年に日本軍がシベリア出兵から撤退するまでは非常に活発な交流がありました。1920 年頃には 6,000 人近くの日本人が暮らし、多くの企業や商店が進出していたそうです。

日本の政府公館としては 1876 年に日本政府貿易事務所が開設され、1907 年に領事館が設置されました。1909 年には総領事館となり、1916 年にはギリシャ式建築の建物が完成し、1945 年まで市の中心部にあるオケアンスキー大通り 7 番地に位置していました。

（写真４：旧日本総領事館）

また、こういった公的な機関だけでなく、多くの人の暮らしの支えとなった場所として、浦潮本願寺が挙げられます。西本願寺が 1886 年に海外布教所として開き、1937 年に閉鎖されるまで当地の日本人のコミュニティを形成する重要な場所として機能していました。日本から離れて暮らす人々にとって慶弔行事などを行う重要な場所として、精神的な支えの 1 つになっていたそうです。また、ウラジオストクにおける最初の日本人小学校が浦潮本願寺の一室で開校さ

れ、1913 年に学校がフォンタンナヤ通り 21 番地に移るまでは、子供たちの学びの場としても重要な役割を果たしていました。現在、旧極東連邦大学キャンパスそばの浦潮本願寺の跡地には石の土台が残り、その上に記念碑が立てられています。

（写真５：浦潮本願寺跡）

ウラジオストク市はシベリア鉄道の終着駅（モスクワ方面へは始発駅）ということもあり、ヨーロッパへの入口として多くの日本人がウラジオストクからヨーロッパへ向けて旅立っていきました。特に与謝野晶子（よさのあきこ）や二葉亭四迷（ふたばていしめい）などがヨーロッパへ渡るためウラジオストクからシベリア鉄道を使ったということは有名です。1912 年５月にウラジオストクを訪れた与謝野晶子はその後、夫の与謝野鉄幹（よさのてっかん）を追ってヨーロッパへ旅立ちます。旧極東連邦大学の東洋学院の前には与謝野晶子の記念碑がたてられています。

また、かつて横浜正金銀行が、市中心部のスベトランスカヤ通り 20 番地に支店を開き、満州からの農産物輸出などを取り扱っていました。現在、この建物はアルセーニエフ記念沿海州総合博物館として、沿海地方の自然資料や街の歴史、日本や中国に関係する資料や渤海・女真などの出土品が展示されています。

（写真６：与謝野晶子の記念碑）

（写真７：アルセーニエフ記念沿海州総合博物館）

かつてウラジオストク市には多くの日本人が暮らしていましたが、シベリア出兵撤退、第二次世界大戦の勃発やその後のシベリア抑留などもあり、その数は大きく減っていくことになります。しかし、その歴史的な名残は今でも街のいたる所で見ることができ、観光名所として数えられます。ウラジオストク訪問の際はこういった日本の名残を巡ってみるのも面白いと思います。